

「メディアと子育て」研究

田丸 敏高

鳥取大学地域学部

鳥取県からの受託研究として、「メディアと子育て」に関する研究に取り組んでいる。研究のねらいは、乳幼児期の子育てにおいて、メディアがどのように活用されているのか、明らかにするところにある。現在も研究は進行中であるが、ここではその一部——1歳6ヶ月児健診と3歳児健診の場を使わせていただき実施したアンケート調査集計の一部——を紹介したい。

結果の詳細については報告書に譲るとして、特徴的なところを取り上げてみたい。

TABLE 1 子育てをする上で、テレビは欠かせないものだと思うか

	3歳児	1歳6ヶ月児
a.まったくそう思う	20	18
b.ややそう思う	151	87
c.あまりそう思わない	117	99
d.まったくそう思わない	18	19
合計	306	223人

メディアとは「人が自分の考えを表現したり、コミュニケーションしたりするための手段・媒体」を指し、子どもにとっては雑誌や絵本も大切であるが、ここではいま話題のテレビについて見てみよう。テレビをめぐっては、子どもはかなり早期からヴァーチャルな世界を認知できるとする研究もある一方、2歳まではテレビを見せるべきではないとする見解もあるからだ。本研究はどちらに与するものではないが、テレビが子育てに欠かせないものかどうかについては意見が2つに分かれる実態が示された (TABLE 1)。

では、子どもたちにいったいどのくらいの時間テレビを見せているのだろうか。

TABLE 2 昼間、どの程度テレビを見せているか

	3歳児	1歳6ヶ月児
a. 3時間以上	52	34
b. 2時間～3時間	90	38
c. 1時間～2時間	92	65
d. 30分～1時間	53	44
e. 30分以下	15	36
f. まったく見せていない	5	7
合計	307	224

TABLE 3 夕食後どのくらいテレビを見せているか

	3歳児	1歳6ヶ月児
a. 3時間以上	9	8
b. 2時間～3時間	22	16
c. 1時間～2時間	68	35
d. 30分～1時間	177	51
e. 30分以下	88	65
f. まったく見せていない	29	48
合計	305	223

昼間、夕食後併せて、2～3時間といったところだろうか。ただし、個人差が大きく、どちらの時間も3時間以上もあれば、まったく見せていないと回答する人もいる (TABLE 2, TABLE 3)。

これらの回答は、何を意味しているのだろうか。以下の表がそれを示している。夕食の準備などで手が離せないとき、兄弟姉妹やパートナーなど他の大人がいる人はテレビやビデオを見せる必要はない。また、一人で遊べる子ども、自分の近くで遊ばせることが可能な子どもについても見せる必要はない。そうでない子どもについては、テレビやビデオは大切な育児手段と

なっている。(TABLE 4)

TABLE 4 あなたが夕食の支度等で手が離せないとき、どのように過ごさせているか

	3歳児	1歳6ヶ月児
a.一人で遊ばせている	33	32
b.きょうだいと遊ばせている	147	65
c.友だちと遊ばせている	2	1
d.自分の近くで遊ばせている	22	28
e.テレビを見せている	32	15
f.ビデオを見せている	17	19
g.自分以外の大人と遊ばせている	23	37
h.その他	5	7
合計	281	204

じっさい、情報源としてテレビは高い位置を占めてはいない (TABLE 5)。

TABLE 5 子育てに必要な情報を集める際に、最も頼りになる情報源はどれか

	3歳児	1歳6ヶ月児
a.家族	34	62
b.友人・知人	143	79
c.子育てサークル	7	8
d.保育所・幼稚園	58	20
e.病院・保健所	1	2
f.行政サービス	1	0
g.インターネット	7	10
h.新聞・雑誌	18	19
i.テレビ・ラジオ	6	1
j.その他	4	3
合計	279	204

本調査では、できるだけ子育ての実際に即して、メディアを検討してみたいと考えている。いま必要なのは頭ごなしの親批判ではなく、子育ての応援だからである。この調査から、保護者が子育てに困難を抱える時間は、「寝かしつけ」と「食事」であることがわかった。また、「寝かしつけ」は親子が関わる大切な時間でもある。睡眠と食事に関しては、実は個人差が非常に大きい。ある子どもで通用することが他の子どもにも通用するとは限らない。子どもの発達や性格に即したさまざまな生活スキルを発見し交流することが今後の課題であろう。

ところで、本研究のメンバーのうち教員は地域教育学科と生涯教育総合センターとで10人である。それぞれが個性的なせいか議論がつきない。効率ばかりが優先されがちなこの頃、腹藏なく議論しあえる関係は大切である。それを大切にしながら、地域に根ざした研究を進めてきた。なお、本研究は、事務方や院生・学生にも日常的な協力を得て研究を進めている。倫理審査にあたっては、地域学部内外から医師会や法曹界からも協力していただいた。調査に際しては、保健所や幼稚園等に尽力いただき、何よりも多くの保護者の協力を得ている。もちろん、委託側の鳥取県子ども家庭課にもさまざまな援助をしていただいている。末尾ではありますが、ここに御礼申しあげます。

(注) 表は、共同研究者の1人である神谷哲司氏が作成したものを基にした。